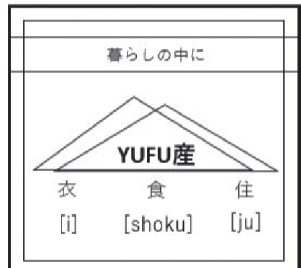


伝えたい 由布のもの NO. 7



〈取材・文〉
岡田鹿乃子
Kanakoko
Okada

東京都出身。進学・就職を経て2020年8月に由布市の地域おこし協力隊に着任。移住定住担当として活動しています。豊かな季節のうつろいを感じたいと思い、お茶をはじめました。

● 問い合わせ

総合政策課

☎ 097-582-1158

日常に溶け込む由布院駅アートホール

今回の〈伝えたい由布のもの〉はアートな由布のものです。湯布院町川南にお住まいの廣瀬尻里さんがつなぐ〈日常に溶け込む由布院駅アートホール〉を紹介します。

廣瀬さんは豊後大野市出身で、短期大学やフランスで映画の評論を勉強した後、芸術祭の事務局や文化施設での事業担当として展覧会などの企画・運営をしてきました。由布院駅に併設されているアートホールの存在や、町内の魅力的な方々との出会いをきっかけに、由布市に住むことを決めたそうです。作家さんのそばでコミュニケーションをとりながら興味や制作意図を感じとり、サポートをしたいと考えられています。今まで続けてきたことをつないでいくこと、今あるものを組み合わせさせて少しずつ新しいものに変化させることが好きだという廣瀬さん。県内外の作家さんの展示準備や訪れる人に作品のことを伝えながら、毎月展示内容を変え、立ち寄る人を楽しませてきたアートホールの活動をつないでいます。

廣瀬さんは学生時代から「公共と文化・芸術」ということに興味を持っていて、パリ・ピドゥーセンターを訪れたときに、美術館の中ではアートを観賞する人や勉強する学生がいて、外には建物を眺めながら食事をする人、パフォーマンズやダンスをする人などがいました。そこには日常的に文化と芸術があつて、みんなそれぞれのことをやっているけど交わっている、そんな空間がとても尊いと感じました。アートホールもそんな風に誰でも気軽に立ち寄れる場所にしていきたいです」と話します。駅に併設しているアート施設は全国的にとっても珍しく、公共の場であり、誰にとっても開かれた場所であるのが

魅力のひとつです。地域の人でも観光で訪れた人でも、子どもでも大人でも。そして、目的もさまざまです。月ごとのアートを楽しんで、電車を待ったり、観光で訪れる人をお出迎えしたり、散歩帰りに立ち寄りゆっくり過ごすこともできる場所です。「人それぞれの過ごし方を受け止める器の広さがとても面白い」と廣瀬さんはいいます。

これから、廣瀬さんはアートホールの活動や独自のさまざまな活動を通して「作家さんと誰かの出会いの場をつくりたい」と話しています。人は自分とは違うそれぞれの考えを持っているもので、だからこそ人が好きという廣瀬さん。作家さんとの出会い、訪れる人との出会いを楽しみにされています。なかなか外へ出かけることができない梅雨の季節。アートホールでそれぞれの時間を過ごしてみたいかががでしょうか。いままでと少し違った日常を味わえるかもしれませんね。

廣瀬さん、ありがとうございました！



〈伝えたい由布のもの〉を募集しています！

詳細は地域おこし協力隊ページをご覧ください。



▲由布市地域おこし協力隊